

2020年度夏季手当 第2回交渉開催

経営側が、 「満額支払える体力はある」と明言！

中央本部は6月4日、申第32号「2020年度夏季手当に関する申し入れ」の第2回団体交渉を行いました。交渉では「満額支払える経営体力はある」という回答を引き出すなど多くの成果がありました。

組合側

経営側が強調するほど、中長期的にも先行きは暗くない

「2019年度期末決算」は「黒字決算」である。対前年比で「減収減益」、足元の業績も「マイナス」と強調しているが、JR東日本単体で純資産を2兆5,513億円も有しており、将来に対する投資も現在、行っている。

経営側は「一定程度の支給水準を維持していく」と言ってきた。

私たちは「要求満額を支払える経営体力は十分ある」と見ている。
私たちの試算では、満額回答で約580億円になると見ている。「2019年度期末決算」において「賞与引当金」が約573億円計上されている。「安定支給」を求める。

コロナ禍での努力の評価を！

コロナ禍では「社会的使命」の自覚を持ち、勤務時間外においても家族の協力を得ながら、今日も各系統で力をあわせて列車を運行している。

経営側

足元の状況をしっかり見る必要がある

将来に必要な投資を行っているが、本業の収入の先行きが見えない。
急速にテレワークなど「鉄道を利用しない仕事」が進んでいる。
会社として「変革2027」で示している数値目標の達成にむけて取り組んでいく。

満額支払える体力はある

賞与の準備として「賞与引当金」があるが、足元の業績など全体を見ての判断もあることから、会社として「すべて使う、使わない」との考えはない。また「賞与引当金」が上限としている訳ではない。あるか、ないかを問われれば、満額支払える経営体力はある。

社員の努力は判断材料に入る

社員の努力は認識している。総合的に判断する中の材料に入ると考えている。
会社として「安定支給」にむけて努力するが、約束できるものではない。